

文芸復興

東京都

時代と共に、時代を超えて

わが同人誌「文芸復興」が創刊されたのは、昭和十七年（一九四二）二月のことである。終戦を挟んで十年余の空白があるが、今年（二〇二〇）で、創刊から七十八年の歳月が経つ。

簡単にその歴史を紹介したいと思う。

昭和十六年（一九四一）一月、同人雑誌が大同団結して、日本青年文学者会が結成された。その呼びかけは国策協力団体日本文学者会からなされた。日本青年文学者会の結成と共に、五十余誌あった同人誌は八誌に自主統合された。国家側の文芸統制に呼応するような形で日本青年文学者会が結成され、同人誌が統合された事に対する批判もあった。しかし、商業誌は言うに及ばず、文学同好会、同人雑誌グループの中には、摘発、検挙を受け、廃刊に追い込まれたものも多くあり、統合は時流に押し流されない為の自己防衛という側面があった。

統合されて残った八誌は次の通り。

「文藝主潮」「辛巳」「正統」「文芸復興」「新文学」「新



「文芸復興」同人
左から西澤建義、森下征二、堀江朋子、丸山修身

文芸復興

38

2019・5 / No.138

作家」「昭和文学」「青年作家」。（高見順『昭和文学盛衰記』より引用）

統合された五十余誌のうち小説界、青衿派、文学陣、季節、裸木、現実、樹林、クロノスの十誌は「文芸復興」という誌名で、昭和十七年二月に創刊号を発刊した。編集長は城野政夫、編集発行人細野孝二郎。私の父上野壮夫は八誌の上部組織日本青年文学者会の委員長となり声明文を「文芸復興」と「新文学」に掲げた。

「（略）私どもは永らく分散孤立の状態におかれてゐた純文藝同人誌の自發的統合を成し遂げ（略）同志的血盟を誓ひつつ力強く出發することとなりました。（略）惟ふに、私どもは國家の光榮ある世紀に遭遇し、祖國の理念と現實

とを身を持って生きていることにより、當面する世界的革新に寄與されるべく要請されてゐるのであります。」

国策に添った声明文である。厳しい言論統制下抵抗は許されなかったが、文学者魂は健在だったことが、「文芸復興」に掲載された作品に垣間見られる。十八年五月号の編集後記で、「青年文学者會所屬の他の七誌とともに賣上の全部を擧げて帝國海軍に献納することとなった」とも上野は書く。この号には、伊藤整、上林暁、上田進、浅見淵なども執筆している。昭和十九年一月、八誌の同人誌も「日本文学者」一誌となって終戦を迎えた。

第二次「文芸復興」は昭和三十一年に発刊された。表紙は洋画家麻生三郎が描いた裸婦の素描。一集から百集までの編集長が落合茂。第三集（昭和三十一年六月）は、五十余人の大所帯となった。その後、宮地嘉六、細田源吉なども同人に名を連ねたが、戦前に多くの作品を発表した二人もこの時、六十代後半から七十代。総じて同人の年齢は高かった。

当代の文芸評論家平野謙は、「文芸復興」のことを、「どうしても文学を断念することのできぬ一種の執念みたいなものから、相当年配の人たちが出している雑誌」（「文学界」昭和三十三年五月）と評した。

これに対し、同人の上野壮夫は「売りものにならない小説や詩を書く者がいなければ、強力なマス・コミ商業政策

の中で、文学はだんだん衰え、未枯れてしまおうだろう」

（「文芸復興」第九集昭和三十三年）と反論した。

第百集（一九九六（平成八）十一月）は落合茂が代表・編集となつてゐるが、発刊直前の十月に急逝。第百集に添えられた同人一同の挨拶文には「ここに「文芸復興」は記念すべき一〇〇号をもって、新しい旅立ちを期し、完結いたします」とあった。

第三次「文芸復興」創刊号は、一九九七年（平成十一）六月に会田武三が代表兼編集長となつて発刊された。発刊までには様々な思惑や逡巡があつたと思われる。廃刊も視野にあつた。創刊からの同人は、現在上原アイのみ。堀江朋子は第二号から正式に参加した。第五号から現編集長の西澤建義、その後、森下征二、丸山修身、多門昭、松尾蝸舎、松元眞などが参加。二十二号（二〇一〇）から、会田武三に代つて堀江朋子が代表となつた。長谷川龍生、吉田眞規子（真木侑）、稲垣美和子、小田怜子、中嶋英二、坂本満津夫、南みや子が参加。死亡、退会があり、現在の同人は上原アイ、小田怜子、坂本満津夫、中嶋英二、西澤建義、丸山修身、南みや子、森下征二、吉田眞規子、堀江朋子、四十一号（二〇二〇・十一）から垣花理恵子が参加予定。

以上、「文芸復興」の歴史と同人について記した。特筆すべきは、二〇一二年十二月の創刊七十年記念特集号では、作家辻井喬氏のインタビュー記事を掲載し、二〇一七年

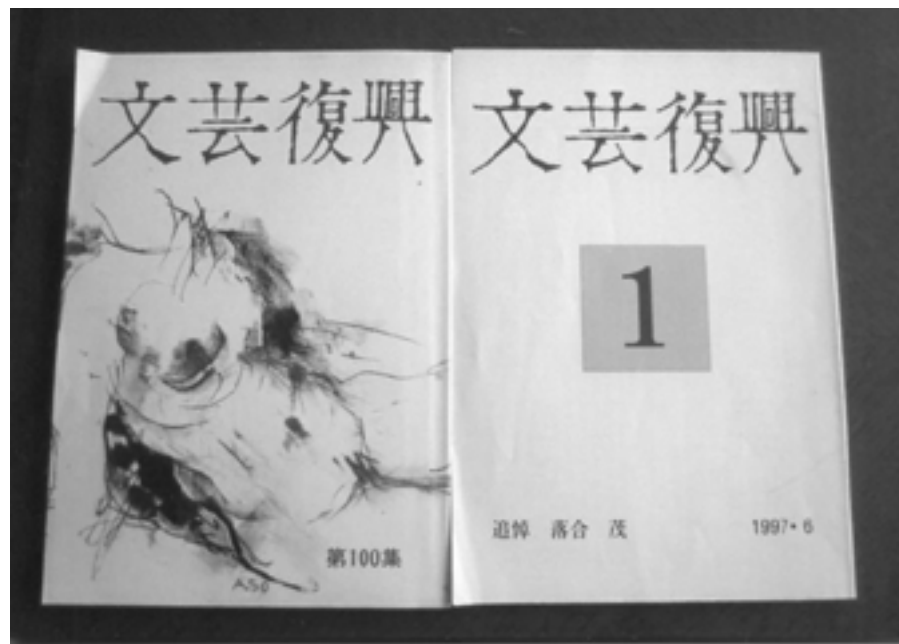
十一月の七十五年記念号で、文芸評論家志村有弘氏の寄稿を得たことである。

「文芸復興」の歴史を振り返つてみて、激しい言論弾圧のあつた戦時下、細々と文学の灯を灯し続けた先達の苦難を思い、再びそのような時代が来ることを願つた。さらに、平野謙と上野壮夫とのやりとりを読んで、何の為に書くのか、文学とは何かという問いを改めてつきつづけた気がする。

今も、「文芸復興」同人の年齢は高いが、みなかなりの力量の持ち主である。第一に書くことが好きなのだ。文学に対する執念とは違つた次元のものである。第二次「文芸復興」創刊号の表紙を描いた麻生三郎は、「ものがながくあることが、存在していることの美しさが、なんであるか」の意味を、今の人が省みないとしたら、「今の人達の精神構造を未来の青年たちはわからないでしまうことになる」と書いている『一九三〇年代―青春の画家たち』。私は、「ものがながくあること、存在していること」という文を「伝統」と解釈した。

「文芸復興」は、戦中・戦後、昭和という時代と共にあつた。そして、平成、令和という時代と共にある。時代は変転して行くが、変わらないものがある。時代を超えて美しいもの、人の心を打つものがある。

変わらないものを求めて、人は文を著し絵を描く。私は



そう思っている。なにか、大上段に振りかざした結論になつてしまつたが、畢竟、「好きだから書いているだけ」が、一番正しいかもしれない。

（代表／堀江朋子）



文芸復興

〒169・0074

東京都新宿区北新宿二・六・二九・415
文芸復興社 堀江朋子方

TEL 03・5386・4232